



ボクが速く走れる理由？  
何よりも走ることが好きだからかな。



友だちとの練習が楽しく  
いつの間にか速くなった

「将来は陸上の選手になりたいです」

と目を輝かせるのは、武里西小学校6年生の山崎颯太くん。平成27年度の全国小学生陸上競技交流大会で男子「4×100m」リレーに出場し、全国3位の成績を収めた。市内きつての俊足の小学生ランナーだ。

4年生の春に宮城県から転入してきたばかりの頃は、それほど足が速かったわけではない。武里西小の友だちと一緒に練習するうちに走るのが楽しくなって、家に帰ってから走るようになった。そのうちにめきめき足が速くなり、5年生のときには市内の大会で優勝するほどの力をつけていた。

武里西小には山崎くんのように俊足を誇る児童が揃っている。市内全24校の小学校は、東・西・南・北の4ブロックに分けて毎年陸上大会を行っているが、同校は平成15年の開校以来、南ブロックで13連覇という快挙を達成している。足が速いのが伝統だ。

そもそも、開校の際、教育目標の一つに「陸上を強くすること」を掲げたことに



平成27年度全国小学生陸上競技交流大会の4×100mリレーで3位に入賞。2走を務めた山崎くん。



出せる子を選び、集中して練習させる。しかし、武里西小は違う。児童一人ひとりに出たい競技を選ばせ、大会に向けて全員で練習をしていく。大会の3日前に先生が選手を発表する。

「どの子も『大会に出たい』と、一生懸命に練習をする。選ばれないと悔し泣きする子も多い。選ぶ私たちも胸が痛みます。でも、全員が大会に向けて練習することで、体力が上がリ、一生懸命にやることで、スポーツの楽しさを覚え、好きになっていく。私たちの目標はそこにあるのです」

(池澤教諭)



「体育の時間でもとにかく褒めるようにしています」と池澤教諭。

春日部市は市全体としても小学生の陸上のレベルが高く、埼玉県の代表として全国大会に出場する児童の半分を春日部が占めることが少なくない。

花車主査は、その理由の一つを、「先生方が非常に熱心で、ちゃんと基礎を教えているから」と言う。

春日部市内の小学校では、陸上をきちんと教えようという文化があり、先生方にもそれが受け継がれている。

「陸上といえば春日部」。

この伝統は熱心な指導者と教え子たちによって脈々と続いていくだろう。



正善小学校で行われた陸上大会。平成27年度も優勝できて笑顔いっぱいの児童たち(右ページ下3点の写真も含む)。



開校当初、教室に残る児童がないよう、休み時間は校舎に鍵をかけるという徹底ぶりだった。今は校舎に鍵をかけることはなくなったが、休み時間になるとほとんどの子が、ドロケイやリレー、かけっこを楽しんでいる。校庭には平成25年にジャングルジムができたばかりで、遊具は最低限に留めている。

「運霸は子どもたち自身の誇り。一方で、『自分たちの代で負けたらどうしよう』という気持ちも持っている。だから、大会の前になるとみな真剣に、しかも自主的に練習に励んでいます」と池澤成一教諭。

市の陸上大会は全員が出られるわけではない。いい記録を出した子が選ばれる。多くの小学校では、早い時期から記録を

**「陸上といえは春日部」を  
未来へと引き継ぐ**



「児童がスポーツ好きになる練習方法を考えることが大切」と花車主査。

端を発する。同校から現在、市のスポーツ推進課に配属されている花車進矢主査は、「走ることは体力づくりの基本。運動することは学力向上につながる」ともいわれています。そのために陸上に力を入れていくことにしたのですね」と分析する。

開校当初、遊具が設置されていなかったが、休み時間は校庭で遊ぶよう児童に促した。遊具のない校庭での遊びといえは、かけっこ。子どもたちは自ずと走る力をつけていった。現在も走って遊ぶ習慣が受け継がれ、休み時間になると、校庭は走り回る子どもたちであふれる。かけっこが同校の陸上を強くしている。



持久力が勝負の1000m走。



ハードル走も武里西小学校が得意な種目。



バトンの受け渡しも普段の練習の成果。